

# わが心の遍歴

## (2) 日本文化への目覚め

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子)/かわむらゝえい  
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同大学哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルク大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor Theologie)の学位を取得。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化研究科教授として哲学、宗教学を教える。著書は『宗教学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教学』(新樹出版社、'94)、『神と宗教学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新樹出版社、'88)他多数。

### 1. ドイツへの留学

ドイツのハンブルク大学の神学部に留学したのは、1965年5月のことであった。その8カ月前には、筆者は、結婚しており、ドイツに向かって横浜港を出発した時には、京大のドクター・コースに入学してまだ1カ月余りであった。ナホト力迄の船旅では、横浜港で別れた両家の両親、兄弟姉妹、祖母への様々な思いで、二人は船に酔ってしまった。その頃は、筆者は奨学金と家庭教師のアルバイトで暮らす苦学生であり、夫はドクター・コースを出たばかりの、大学の非常勤講師であったので、新婚旅行を省略した。それで両親たちが、新婚旅行の代わりにと一等船室旅行の費用を貸してくれた。しかし、高齢の両親や祖母たちにはもう二度と会えないかもしれない不安と初めてのドイツ生活への不安から、船室でのご馳走を二人は殆ど口にすることができなかった。しかし、その船の食事のテーブルで組み合わされていた他の二人の船客は、意外にも小説家の井上靖氏とそのご令息(東大のドイツ文学専攻の学生さん)であった。こちらの二人が船酔いで真っ青な顔でヒョロヒョロしている時に、井上靖氏は船室で小説を書き続けているとご令息から伺い、私たちが恥も、そんな力強い人間になりたいものとかから願わずにはいられなかった。

モスクワ経由で様々な失敗を繰り返しながら、目的地のハンブルクの地に着いた時は、先ずその町の自然の美しさに茫然自失の思いがした。美しく整えられたハンブルクの町の美しさは、まるでお伽の園に降り立ったようであった。5月の新緑に木々は輝き、小鳥の鳴き声はまるでモーツァルトの音楽さながらであった。町の中心部にあるアルスター湖は、太陽の光に輝き、その上を白鳥が泳ぐ光景は、まるで絵のようであった。

8年半お世話になったハンブルク大学での生活は、神学部の組織神学科においてであった。京大の大学院での指導教授であった武内義範先生の推薦状を持ってH.ティエリク教授をお訪ねし、その時から神学(キリスト教)に限定された宗教学科の勉学が始まった。初めに目にはかかるティエリク教授は、大変お背が高く、お声が低いバスで、ワーグナーのオペラに出てくる巨人さながらという印象を受けた。

何か分からないけれども潜在的に、将来大変な嵐に出会うであろうことを予感していた夫や筆者は、極めて慎重にハンブルクでの生活を始めた。やがて、予感していたその嵐が訪れてきた。日本学科に講師として勤務していた夫は、西洋人と日本人とのものの考え方の激しく相違することに我慢できず、研究だけに専心したいと願って勤務をやめ、哲学部の哲学科の留学生となった。それは、日本でも学生運動が最も激しくなっていた1969年の夏のことであった。

ドイツでも、その頃から教授の権力が批判され、大学の制度も色々改革された。ハンブルク大学の教授会は、学生側の要求によって、教授層3分の1、助教授・講師層3分の1、助手・学生層3分の1というメンバーの構成によって、実行された時期もあった。しかし、これは直ぐに廃止されざるを得なかったという。教授会そのものが、機能しがなくなったからと仄聞した。また、ハンブルク大学では博士論文と教授資格論文(ハビリタチオン)とは別々に提出せず、両方を一つにし、前者のレベルを高めて、これを同時に教授資格試験とすることになった。教授の権力を弱めるためであった。しかし、これも10年程で廃止となったと仄聞している。このようなドイツの大学の大改革の時期においての夫と筆者の生活は、夫の退職によって、ドイツの大学や財団や政府から給付される、二人のそれぞれの奨学金で過ごされることになった。それらは、二人の半年ごとの提出論文によってのみ継続可能なものであった。それは、綱渡りのようであった。今この時にも、筆者は、その当時受けたドイツ政府や大学の、またティエリク教授研究室やオイローバ・コレクから受けた莫大な奨学金の恩恵に対して、筆舌には到底尽くし得ない感謝の念で一杯である。住居も民間のアパートから、ヨーロッパ一番の設備といわれるハンブルク郊外にあるドクランデン・コレク(博士論文執筆中の学生用の寮)であるオイローバ・コレクに二人それぞれに試験を受けて入寮した。バス・トイレ・台所付きの独立の部屋を二つ与えられ、ここで生涯でも最も恵まれた時期を過ごすことができた。ドイツ人20人、ヨーロッパの各国の留学生20人そしてそれ以外の世界の各国からの留学生20人の構成からなる60人が3年を限度に居住していた。寮長は、第一回ヘーゲル賞

受賞者のハンブルク大学のB.スネル教授であった。アジアの国からは、その当時はまだ私たち二人だけであった。そこで3年間の生活の後の約13カ月余りは、二つの学生夫婦寮にそれぞれ半年程住みながら、私たち二人のそれぞれの勉学が進められ、ドイツ生活の後半期における様々な感謝すべき更なる経験が与えられた。

### 2. ハンブルク大学での日々

ハンブルク大学には夫の親友が既に数年前から日本学科の第一講師としてご滞在であった。夫は母校の京大の諸先生方のお世話で、同学科の第二講師として赴任した。それは、主に同学科の図書室のお世話の担当であった。従って、筆者にもできる仕事は全部筆者が引き受けて、夫は同教室の主任教授の翻訳のお手伝いや読書に専心する日々が続いた。そんな日々にも、筆者も日本学科の図書室の図書類を毎日拝借しては、先ず日本の本の読書に励んだ。余りにも急激な文化や環境の変化に、大変なカルチャーショックを受け、自らの文化の根拠が全く分からなくなってしまったからであった。ドイツでの最初の数年間は暇さえあれば、ただひたすら日本の文化に関係のある日本人による日本の本を端から読み続けた。今から思えば、日本学科に日本語の沢山の図書があったことは、筆者に決定的な影響を及ぼすことになった。その頃最も多く読書したのが鈴木大拙の著書であった。

神学部での勉学は、初歩から一步一步着実にゆっくりとしていたので、浜山のエネルギーが日々余ってしまっていた。それで、日本学科の図書室の整理や日本書籍の読書のみならず、大好きな音楽の趣味にも浸って、しばしば教会音楽や宗教音楽の音楽会にも通って、ドイツの音楽を

徹底的に聞きもした。バッハのマタイ受難曲を毎年ハンブルクの大教会で聞いた。ヨハネ受難曲やマルコ受難曲も何度も聞いた。学生割引で聞けたので、無料に近い程に安かった。ピアノの練習にもずっと励んだ。また洋裁にも励んだ。更に、毎月一度は鋏と櫛を持って夫の理髪師にもなった。また、夫は映画が大好きであったので、ドイツ語の勉強と称して、学生寮の近くの、これまた無料にも等しい程に安い、昔々の映画をドイツ語でしばしば見たりもした。また、お友達のお母様方から、ドイツの美味しいケーキの作り方を教えて頂いて、毎月沢山の果物ケーキを作り、お友達を招待したりもした。お友達の結婚式にも幾度も招かれて、ドイツのお祭りや習慣に馴染んだりもした。毎日曜日、魚市場や野菜市場に出かけ、様々な国のお料理を、貧しいながらも工夫してはお友達を招いたりもしていた。庭から沢山のリンゴを採ってきて、沢山のリンゴジャムも作った。全く夢のような日々であった。貧しい奨学金生活ではあったが、大勢の学生さんと一緒に学生旅行にも3度参加した。パリ迄の往復バスでの1週間の、往復ハムレット号船でのイギリス迄の1週間の、そしてローマまでの往復汽車での1週間の学生旅行であった。また、毎週美味しいコーヒーを夫と共に大学のN先生の研究室でご馳走様になった。沢山の数えきれない程の色々な経験があった。しかし、ドイツに留学時代の筆者にとって何にも増して大きな出来事は、8年半程ドイツでご指導頂いたH.ティエリク教授との出会いであった。

ティエリク先生は、毎ゼメスター(半年一期の



1973年6月22日、H.ティエリク教授の御暮宅のお庭でのお祝いのパーティ。中央がH.ティエリク教授。向かって右が筆者(博士論文口頭試問終了の夜)。背景は真っ赤なバラの花壇。

学期)の初めに、オーバー・ゼミの学生と連足を共になされ、その後で全員を「青年の家」やご自宅での夕食会にご招待下さった。学生は皆、その日を毎学期楽しみにしていた。筆者も留学期間が長かったので、十数回もお招き頂いた。その都度沢山のドイツのお料理をご馳走様になった。先生のその頃お書きになった本を頂いたりもした。しかし、ティエリク先生は、一年に一度は大変な病気になる。ご多忙の中を、ミカエル教会での2000人を前にしての礼拝や信仰集会を続けていらしたからでもあった。救急車で迎えられて、教会から入院されたことも幾度かあった。大学の休講はあっても、教会での集会が休会となることは、少なくとも筆者がハンブルク大学に留学中にはなかった。寝台車で病院から教会に連れられ、集会でのお話の後すぐにまた寝台車で病院にお帰りのことも一度ならずあった。その間に筆者は学問のみならず、人間の生き方も学んだのであった。ある時、先生のご病気が数週間にもなり、ご退院なさってご自宅でご静養中と仄聞いていたので、1時間程電車で揺られてご自宅に夫とお見舞いに向かったことがあった。御奥様に「書齋にいますからどうぞ」と仰って頂いたのので、お部屋にソツと近づくと、シンとした、四面の壁が天井まで恐ろしい程に書籍で一杯のお部屋の片隅に、ティエリク先生は椅子の上で瞑想中でした。入口でどうしたものかと躊躇っていると、先生はゆっくりとお部屋の中央のテーブルに近よって来られ「どうぞ」と仰って下さった。雪の積もった寒い日であったので、御奥様が運んで来て



1970年頃、オイローバ・コレクであるパーティーの夜。向かって右が寮長のB.スネル教授(古典学)、中央は、その当時ハンブルク大学哲学科のC.F.V.ヴァイツゼッカー教

下さったワインを皆で頂きながらその時先生からお伺いしたお話を、今でも決して忘れることができない。寒くなると必ずのように罹られたご病気は肺塞栓症であったので、まだ呼吸が苦しいのではないかとご心配申し上げたのではあったが、「いや、もう大丈夫」と仰って聞かせて下さったのは、先生の哲学の指導教授であられた、O.ヘリゲルの禪的なご生活振りであった。西洋一点張りのティエリク先生がご自身でどうして瞑想なさるようになったかのお話であった。先生のこのお話をきっかけに、夫は忘れかけていたプロテスタントの、先生と同じルター派の教会に毎日曜日筆者と共に求道のために通い始め、その年の暮れのクリスマスに洗礼を受けた。これは、オイローバ・コレクを満期で出ていく寸前の、病期1年余り前の出来事であった。しかし、その時には、前回よりはもっと大きな嵐がすぐそこ迄近づいて来ていたのであった。異文化との出会いの真っ只中で。

### 3. 夫の他界と流離の旅への船出

1977年10月4日、夫は名古屋大学医学部の病院棟で、癌で他界してしまつた。ハンブルクの教会での受洗後、段々と身体全体が浮腫み始め、ハンブルク大学の付属病院の医師の勧めにより毎日ジョギングや水泳をして健康に気を付けはじめた。病氣一つしたことのない健康そのものの夫ではあったが、医師の勧めで始めた運動で夫に無理のないように、筆者も夫と共に運動や散歩をした。そして、兎に角二人それぞれに博士論文を書き終えて、お別れに際して、ティエリク先生からは以前ご挨拶にお伺いしたご自宅のお庭から採ってきて下さった一本の真っ赤なバラを、御奥様からは先生は「今日は日曜日、教会の説教で来られません」と、筆者の大好きなスマイルの花束をハンブルク空港で頂いて、帰国したのであった。しかし、後から分かったことではあるが、退職した辺りから夫の身体の中で蝕み始めた癌は日増しに身体中に転移していたのであった。救急車で名古屋大学病院に入院した時には、既に手の施しようのない程の末期癌に進行してしまっていた。

夫の他界後、筆者は大海に浮かぶ木の葉さながらに心の流離の旅に、異文化間対話に、諸宗教間対話に、出かけた。先ず出かけたのは、禅のお寺であり、FAS協会であった。